

(近刊図書紹介)

## 『道徳教育の取扱説明書 ―教科化の必要性を考える』

(貝塚 茂樹、学術出版会、2012年9月15日刊)

佐藤 公

「道徳」は「教育」しなければならないものなのか。できるものなのか。この問いに対し、否定的な反応を示す人々は少ないだろう。人間行為の善悪や価値判断の基準とすべき「道徳」も、人間が共有すべき価値や知識を伝達する「教育」も、社会的に機能し日常生活を構成する営みである。それ故、人間としての成長や他者との関わりの中に、当然存在している・しなければならないという経験や感覚が存在しているはずだ。

しかし、それら営みが、「学校」という場での道徳教育＝「道徳の時間」と重ねられると、人々の反応はとたんに割り切れない様相を呈する。「道徳」の「教育」という普遍的な営みが、近代国家の制度的所産である「学校」という場において、一定の価値選択と内容構成、そして教材を有する「道徳の時間」という枠組みで行われる時、営みに対する賛成・反対の意思表示以上に、賛否を論じる事自体にある種の「不自由」さを伴う状況が立ちあらわれてくる。

著者はこの、「道徳」を「教育」することを指しているはずの道徳教育という言葉が持つ響きを、「複雑で多様」であり、「不思議」であると評している。そして、道徳教育をめぐる展開してきた、戦後の教育問題論議にみえる対立やゆらぎを「思考停止」と評して、道徳教育の停滞の打破を現在の教育課題として取り上げている。すなわち、「戦前悪・戦後善」「国家悪・教育運動善」といった二項対立式の構図を乗り越え、道徳教育活性化に向け新たな取り組みの創出の必要性を説こうとする。

この状況において著者は、子どもの心に向きあうための道徳教育の再構築と活性化を実現するには、道徳教育を「教科化」すべきという立場に立つ。それは、日本社会が抱える教育課題に向き合うことを「タブー視」せず、歴史的な視点から捉え学び、その解決と発展のための議論を粘り強く進めようとする、著者が教育学者として貫いてきた視点であり、根ざしてきた立場に基づく主張である。

本書は、道徳教育の「教科化」を切り口として、これからの道徳教育を取り扱うための新しい指針を作り出すための考える材料を提供するものである。その材料として、修身科や教育勅語等、道徳教育を論じるにあたって避けられない近代日本教育史上の課題の分析と、「生命に対する畏敬の念」に代表される現行学習指導要領に掲げられた価値や、スピリチュアリティといった現代社会における青少年の心の問題をめぐる課題といった、過去と将来への眼差しを持って、所論は展開される。

以上をふまえ、本書の構成は大きく二つに分かれている。第I部では教科化の必要性を、修身科の過去の精算と、社会観・国家観の再生という課題に応えるためのものとして論じる。

第Ⅱ部では、教科化の課題を、宗教的情操をめぐる宗教教育やいじめなどの社会問題、国旗国歌等、これから対峙や解決が迫られる課題を中心に考察する。以下は、具体的構成である。

はじめに

#### 第Ⅰ部 「道德の時間」をどう活性化させるか

（「修身科＝悪玉論」だけでは何も解決しない／修身科は今も清算されていない／急がれる「教育勅語後遺症」の克服／何が「道德の時間」を形骸化させているのか／徳目を「教える」ことが道德教育の基本である／「他者」とのつながりを解体した戦後社会と教育／「愛国心」を論じない道德教育はありえない／崩れかけている「郷土愛」と「愛国心」の関係／「国旗・国歌」とは国家論の問題である／道德の「教科化」の論議を盛り上げよう／道德の「教科化」を提案する）

#### 第Ⅱ部 「生命に対する畏敬の念」をどう育てるか

（何が宗教教育を「タブー視」させてきたのか／錯綜する「宗教的情操」と「生命に対する畏敬」の関係／スピリチュアリティと道德教育／「死者への視線」を欠いた「生命に対する畏敬の念」）

補論 中学校道德の読み物資料と「畏敬の念」

補論 戦後道德教育史の中の「宗教的情操」と「生命に対する畏敬」

おわりに

当然のことながら、「教科化」は最終目的でも、新しい道德教育を創りあげるための大前提でもない。「教科化」によって、現在の道德教育が抱える課題や停滞する状況を全て払拭できるわけではないことは、著者も重々承知しているところであろう。だからといって、従来の「道德の時間」のままでよいというわけでもない。これからの道德教育のあるべき姿を、「修身科」という遺産や「特設道德」の誕生という時期にまであえて状況を引き戻し、これまでの中庸を得たあり方や新しい第三の選択肢も含め、現在の我々当事者自身の手で模索すること。本書を通じ、著者が我々読者に求めているのは、このような姿勢であろう。

折しも、先の総選挙の結果、約三年ぶりとなる政権交代が起こった。自公連立政権下にあった2008年、当時の安倍内閣に設置された「教育再生会議」は、最終答申で道德教育の「教科化」を提言したものの、実現に至らないまま活動を終えた。当然のように今後、改めて戦後の教育体制の見直し、さらには「教科化」への「再チャレンジ」も始められるだろう。

その時、「教科化」に向けた議論を突破口として、道德教育が活性化を遂げられるのかどうか。よりよい道德教育を創出するために、歴史に学び、理念を再構築し、制度を作り上げる必要がある。「教科化」が成し遂げられたとしても、道德教育をとりまく世論というところのない空気のみならず、法制度から教員養成に至るまで、広範な変化が引き起こされなければならない。活性化の実現には、現実的課題もまた山積していることは事実だ。

しかし、本書での提言のように、道德教育の来し方行く末について論じることをタブー視せず、まずは議論することからはじめなければ、それこそ何も変えられない。その結果がどのような形であれ、21世紀を迎えた日本社会、そしてこの社会を担うにふさわしい人間が共有すべき「道德」と、それを支える道德教育のあり方が示される第一歩となる。歩み出すべきその道のりを、粘り強く進み続けるための智恵と経験が、本書には詰め込まれている。